

論文紹介：：Covid-19 パンデミック下における死や死別、悲嘆の経験
が英国の新聞紙上でどのように報じられていたかの分析

日医総研 主任研究員 田中美穂

Selman LE, Sowden R, Borgstrom E. 'Saying goodbye' during the COVID-19 pandemic: A document analysis of online newspapers with implications for end of life care. *Palliat Med.* 2021; 35(7): 1277-1287. doi:10.1177/02692163211017023

以下では、上記論文の紹介を行う。本論文の著者は、英国ブリストル大医学部の緩和ケア・終末期医療研究グループの研究者二人と英国オープン・ユニバーシティの研究者である(出版当時)。本論文の背景には、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)パンデミック(世界的大流行)で多くの人々が亡くなる中で、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、患者本人と患者の家族や親しい友人らがパンデミック以前の状況とは異なる死や死別を経験しているということがある。

パンデミックにおいて報道機関は、COVID-19 に伴う死や死別についてさまざまに報じてきたことは記憶に新しい。本論文の著者らは、パンデミック以前の先行研究を引用し、経験に意味を与えるようなナラティブ(物語)を作ったり、死と死別に関する文化的な考え方を反映し、またそれを強化したりする上で、報道が中心的な役割を果たしている、ということを示している。換言すると、報道によって規範的な死や死別のイメージが固定化され、それが報道を受け取る人々に影響を及ぼすということである。

本論文の目的は、COVID-19 パンデミック第一波のさなか、英国の主要なオンライン新聞が、COVID-19 関連で患者が亡くなる前あるいは亡くなった後に患者や家族が「別れを告げる」「さよならを言う」ことに関してどのように表現しているかを調査することにより、臨床的な含意について検討することである。

研究方法はドキュメント分析で、筆者らは、抽出した文書の批判的談話分析を用いた。分析対象は2020年3月と4月の特定の2週間における英国の主要7紙のオンライン記事である。

本論文が提示した興味深い論点として、報道の論調が、死や悲しみはどうあるべきかという規範的な見方を前提としており、パンデミック前後の人々の経験や思いに多様性があるということを反映していないこと、COVID-19は、従来の「良い死」や「良い悲嘆」という文化的理解に反する、不自然で前例のないものとして同質的に表現されたことが挙げられる。

本論文の著者らは、COVID-19による死や悲嘆を本質的に「悪い」ものとしてメディアが報じることは、人々の悲嘆に否定的な影響を与える可能性がある、と指摘する。人々が死や悲嘆について同じように理解することを前提としており、個人の選択や価値観や考え方の多様性を無視している、と主張する。著者らはまた、実際には、感染症パンデミックのような災害級の困難な状況下でも「できうる限りの良い死」がありうるだろうし、そうした死の存在を無視していると指摘する。

著者らは、オンライン新聞記事の分析から、医療・社会福祉従事者らに対し、報道が一般市民の死別体験や彼らを感じる恐怖感情に潜在的に影響を与える可能性があるということを認識するよう促している。また、報道機関を教育し適切な情報を提供するために、報道機関との適切な関わりを持つことの重要性も指摘した。著者らは、報道機関に対しても、「こうあるべき」という文化的な語りや問題点の指摘に終始するのではなく、多様な経験を描き、実践的なアドバイスを提供するよう提言している。

なお、著者らは、さよならを言う、別れを告げる、という点に着目した今回の調査手法を用いた根拠として、本論文を出版する以前に出版した下記の論文を引用しているので参照されたい。

Sowden R, Borgstrom E, Selman LE. 'It's like being in a war with an invisible enemy': A document analysis of bereavement due to COVID-19 in UK newspapers. *PLoS One*. 2021; 16(3): e0247904. Published 2021 Mar 4. doi:10.1371/journal.pone.0247904